

フランソワ＝ジョゼフ・フェティスのベートーヴェン批評 —音楽理論に関する批評に焦点を当てて—

大迫 知佳子

(お茶の水女子大学大学院 研究員)

Critical Reaction to Beethoven : Focusing on François-Joseph Fétis' *Études de Beethoven*

Chikako OSAKO

1. 序

1833年にパリで出版された『ベートーヴェンの学習：ドイツ語版から翻訳し、評注、序文、ベートーヴェンの伝記を添えた、和声と作曲の概論』*Études de Beethoven: Traité d'harmonie et de composition, traduit de l'allemand, et accompagné de notes critiques, d'une préface, et de la vie de Beethoven* (1833年、以下『ベートーヴェンの学習』)は、ザイフリート (Ignaz Ritter von Seyfried) の『ベートーヴェンの通奏低音法、対位法、作曲法の学習』*Ludwig van Beethoven's Studien im Generalbass, Contrapunkt und in der Compositionslehre* (1832年初版)を、フェティスが仏語翻訳¹した書である。この翻訳書において、フェティスは、他の著述における彼の特徴を反映し、自身の理論に基づく「ベートーヴェンへ」の批評を展開している。すなわち、彼は本文の翻訳にとどまらず、自身の理論との相違という観点からその内容を詳細に訂正した。

本稿では、この翻訳書の脚注における、理論的事項へのフェティスの訂正箇所を整理する。そして、訂正に至る批判の根拠をフェティス自身の理論によって裏付けることで、その意味するところを明確にすることを目的とする。

2. フェティスとベートーヴェンの関係

実際の訂正箇所を検討する前に、フェティスとベートーヴェンの関係について見てみることにする。フェティスはベートーヴェンとの直接的な交流について、具体的には言及していない。しかし、この2人の接点を窺うことのできる記録がいくつか残されている。例えば、フェティスが作曲の2等賞を獲得した際の証書には、以下のような記載がある。

(略) 作曲の2等賞がフランソワ＝ジョゼフ・フェティス氏、ジュマップ県モンズ生まれ、23歳、音楽院及びベートーヴェン氏の門弟、に与えられた ([Lebreton 1807])。

これは、1807年10月3日付でフランス学士院芸術部門からフェティスに授与されたものであり、フェティスの肩書きとして「ベートーヴェン氏の門弟」という表現がなされている。また、1807年10月8日の日付の入った、会合における記録に残された以下の文面がある²。

フランソワ＝ジョゼフ・フェティス氏、ジュマップ県モンズ生まれ、音楽院及びベートーヴェン氏の門弟... (略) (Becquart 1972: 9)

ここにもやはりフェティスが「ベートーヴェンの門弟」であるという肩書きが明示されている。さらに、ショロンとファヨルの『音楽家の歴史事典』*Dictionnaire historique des musiciens* (1810-11年) におけ

る「フェティス（フランソワ＝ジョゼフ）」の項には、次のような記載がある。

1801年に彼は音楽院に入学し、レ氏の和声のクラスに入った。1804年にウィーンに行き、彼はアルブレヒツベルガーのもとで対位法を学び、かの有名なベートーヴェンの教えを受けた（Choron et al. 1810: 225）

確かに、フェティスの自伝には、彼が1803年から1年半余りパリを離れて旅行をし、ドイツの音楽家達の対位法とフーガを習得したと述べられている（Fétis 1862: 227）。しかし、同自伝には、その旅行中にベートーヴェンと交流があったという記載はない。従って詳細は不明であるが、シヨロンとファヨルの記述から1803-4年の旅行でベートーヴェンに会った可能性があるとも考えられる。

また、フェティスは『ベートーヴェンの学習』の序文においても、本文でのベートーヴェンへの批判に際しても、彼との関係性を示してはいない。従って、上記引用に示された2人の関係が、この著書の出版に影響を及ぼしたかどうかということも不明である。だが、フェティスのベートーヴェン批評の背景に、このような2人の関係が窺えることは興味深い事実である。

3. 『ベートーヴェンの学習』におけるベートーヴェンの和声理論³への批判

ザイフリートの『ベートーヴェンの通奏低音法、対位法、作曲法の学習』は、ベートーヴェンの遺稿におけるベートーヴェンの手による理論的な事柄に関する学習をザイフリートが編集した著作であると言われている（Senner et al. 1999: 112-114）⁴。フェティスの蔵書には、同著の1832年版が含まれている（Bibliothèque royale de Belgique s. d.: 799）。フェティスはこの著作における記述すべてを「ベートーヴェンが記したもの」とみなし、N. D. T（Note du Traducteurの略）というマークとともに、「ベートーヴェンの記述への注釈」として、詳細な批判的脚注を付した。以下に、注の内容を具体的に整理しよう。

3-1. 音程や和音の協・不協和の分類と、それに関連する批判

フェティスは自身の規定した音程の分類における独創性を自負し、それに背くような分類をした理論家達に対して、しばしば歴史をさかのぼってまで批判をしている（Fétis 1840: 6, 10, 100, 1844: 8）。このような、音程の分類に対する考えの厳格さは、ベートーヴェンの記述への注釈にも表れている。

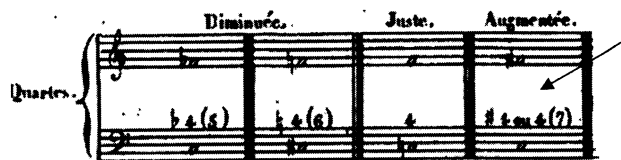
フェティスは、完全4度を不協和音程と表現したベートーヴェンに対して、完全4度は協和音程であると主張している（Fétis 1833: 35）。これは、音程の分類の際にフェティスがこだわった、完全4度音程は解決を必要としないため、協和音程であるという規則に沿った主張である。

また、原著において、ド-#ファに増4度音程の記号（#4または4、譜例1）、ド-ソに減5度音程の記号（b5）が付されている箇所について、フェティスは、次のように述べている。

三全音は、増4度ではなく、導音とともに形作られた長4度である。そういうわけで、4と、この音の記号である×によってそれを表す。×4のように。短5度あるいは減5度の一般的な記号は5である（Fétis 1833: 2）。

フェティスは、現在の一般的な理論において増4度・減5度（三全音）として扱われている音程を、長4度・短5度と呼ぶ。これは、ひとつの調内に出来る音程には長・短を付し、複数の調の諸要素が集まってできた音程には増・減を付すという規則から来ている。つまり、フェティスは、譜例1の増4度として示されている音程（矢印部分）をト長調の三全音と見たわけである。従って、この音程は複数の調の諸要素が集まってできた増4度音程ではなく、同一調内にできる長4度音程であると主張しているということが、この引用から窺える。

譜例 1 記号の使用法における批判 (Fétis 1833: 2) 作図追加は大迫による [以下同様]



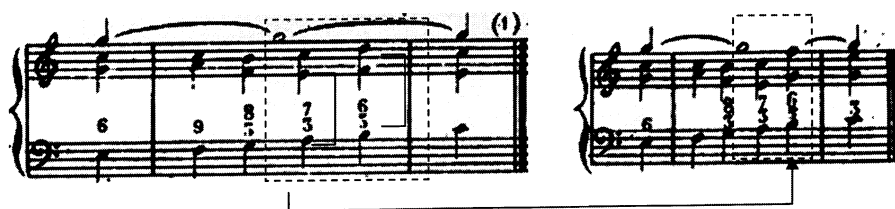
3-2. 和声進行に関する批判

フェティスは、ベートーヴェンが示した和声進行についてしばしば言及している。まず彼が訂正したのは、同書の譜例における、連続4・5・8度音程の使用である (Fétis 1833: 21, 33, 53, 61)。特に譜例 2a について、フェティスは連続進行を避けるために、後続する短5・6の和音を、レ音を省略した異なる配置で書くことを提案する譜例を添えている (Fétis 1833: 61)。この提案は、第4度音上の完全5度音程(ファ-ド)から第5度音上の完全5度音程(ソ-レ)への進行によってできる連続5度を「誤った関係」と呼び、和声進行における連続5度を禁じた彼の規則に由来すると考えられる。第4度音上の完全5度音程から、第5度音上の完全5度音程は2つの調が直接に続く感じを与えるため、フェティスの理論においては許容されない。さらに、完全4度は弱い協和であり、完全8度はむきだしの音程であるという理由で、これらの音程の連続も禁じられている。

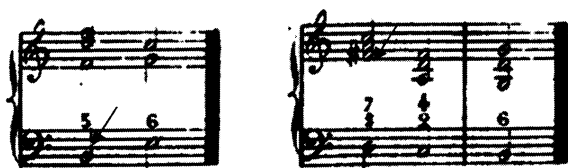
また、連続音程以外にも、和声進行に対する訂正がなされている箇所がある。それらは、次の3種に大別される。ひとつ目は、解決の規則に関わる訂正である。譜例 2b は、諸和音の解決の転回についてという文脈で示された譜例であるが、この譜例でなされた解決に、フェティスは、「誤った解決 (fausse résolution)」 (Fétis 1833: 27) の名を与えている。フェティスはこの解決が不快であるということを示すにとどまっておらず、なぜ不快であるかの説明を加えてはいない。だが、その和声進行を見ると、V₇の和音やその派生形において、導音が主音に、下屬音が上中音に解決しない進行を取っていることが分かる。フェティスの理論において、V₇の和音やその派生形内の導音は主音に、下屬音は上中音に解決しなければならないという規則がある。この規則に則り、フェティスは、ベートーヴェンの解決を誤りと見做したと考えられる。Fétis 1833: 38 においても同様の訂正がなされている。

譜例 2 進行における批判

a. 完全5度→短5度⁵の連続 (Fétis 1833: 61)



b. 導音が主音へ、下屬音が上中音へ解決しない進行 (Fétis 1833: 27)

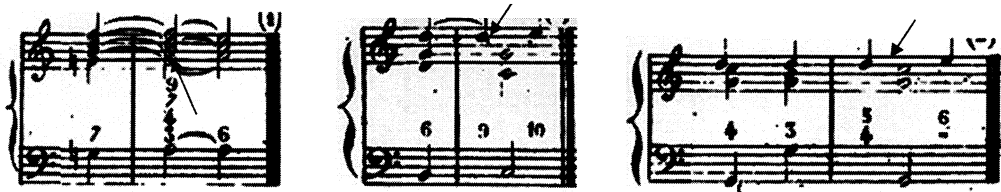


d. 9度の延長 (Fétis 1833: 19)



c. 不協和音の誤った解決

1. 7度音程の2度上行解決 (Fétis 1833: 42) 2. 9度音程の上行解決 (Fétis 1833: 75) 3. 2度音程の上行解決 (Fétis 1833: 78)



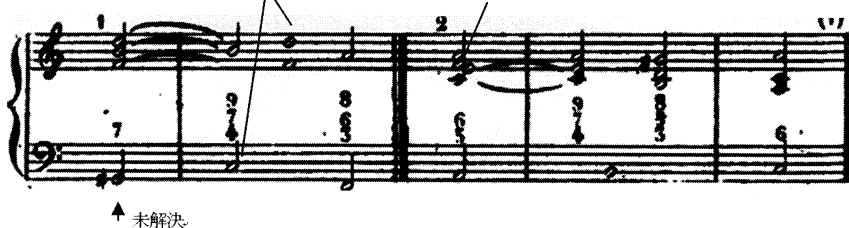
e. 2度の不協和音の解決 (Fétis 1833: 47)

1. 短5・6の和音の未解決 2. フェティス訂正後の進行



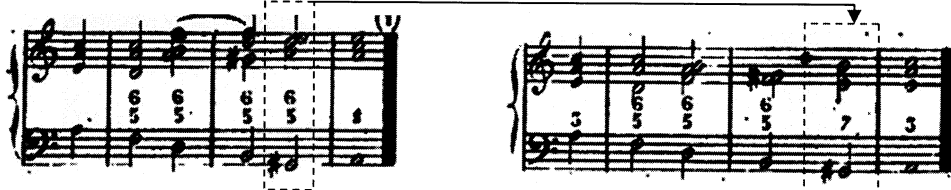
f. 不規則な進行 (Fétis 1833: 64)

1. 導音の未解決 2. 不協和音の未解決



g. 進行における諸声部の入り (Fétis 1833: 43)

1. 解決のない56の和音の連続 2. フェティス訂正後の進行



さらに、解決の規則に関しては、不協和音の解決についての訂正が散見される。フェティスは、譜例 2c に示した進行に、許されない解決として言及した。フェティスの理論においては、2・7・9度の不協和音は、必ず2度下行して解決すべきである。ただし、例外的に導音と上方変位音程だけは上行解決する。従って、譜例 2c-1 において、第2小節に延長の結果生じた7度の不協和音程が上行解決している進行、譜例 2c-2 において、延長の結果生じた9度音程が、譜例 2c-3 では2度音程が上行解決している進行は、フェティスの理論では許容されないことが分かる。その他にも、彼は Fétis 1833: 50 において同様の批判を展開している。

譜例 2e と 2f は、 V_7 や V_9 の和音とその派生形の解決に関する批判であり、同時に不協和音の衝突や自然な和声進行の問題を含んでいる。フェティスは、e-1 の進行は認められないと指摘している (Fétis 1833: 47)。フェティスがこのように書くべきであると示した e-2 の譜例では、2度 (b シード) の不協和音程の衝突が解消され、短5・6の和音 (V_7 の和音の第1転回形) は、I度音上の完全和音に解決している。短5・6の和音の扱いにおいて、フェティスは2度の不協和音程が上声部に来る配置を禁じてはいない。このことから、恐らく、I度音上の完全和音に解決をすべき短5・6の和音が解決をしていないとい

う譜例としては特に本質的でない点と、自然な進行という観点から、上声部が長く同じ音に留まる（譜例 2e-1 であれば、ド音）進行を、フェティスが許容しなかったのではないかと推測できる。

譜例 2f について、フェティスは、1、2 ともに、理論的にも耳に対しても欠陥があると考えた（Fétis 1833: 64）。1 は規則的でないということを彼は指摘しているが、規則的ではない箇所を具体的に示していない。実際に批判箇所を検討してみると、1 では、第 1 小節の導音が解決しないまま次の和音に進行してしまっている。さらに、後続の和音に含まれる不協和音程も解決していない。これらは先に述べたように、フェティスの理論においては許容されない進行であり、この点が批判の根拠であると考えられる。同様に、2 において、彼は 56 の和音の不協和音程（ファ-ミ）が解決していないことを問題視している。フェティスは、この和音は 56 の和音ではなく、I 度音上の完全和音にすべきであるということを示唆している（Fétis 1833: 64）。ここまでが、和声進行への批判のうち、解決に関するものである。

2 つ目は、延長される音の、和音内における位置に関する訂正である。譜例 2d は、解決の掛留を説明する文脈における譜例であるが、フェティスはこれを、ベートーヴェンの作品における間違いのひとつの源とみなした。「この例に見られるように、これらの誤りは、不注意の結果ではなく、人が彼 [すなわちベートーヴェン] に教えた誤った理論の結果である」（Fétis 1833: 19）と彼は述べている。実際に、譜例 2d を見てみると、バス音シによって解決の掛留（9 度音程の延長によるオクターヴの遅れ）がなされていることが分かる。しかし、フェティスは、この掛留を認めなかった。なぜならば、フェティスの理論における 9 度音程の延長は、「音程を形成する高いほうの音の延長」にのみ許されるからである（Fétis 1844: 61-62）。そのため、譜例 2d に見られるような、バス音（低いほうの音）の延長は、フェティスの理論とは相容れない。同様に、フェティスは、自身が想定していなかった 7 度音程の延長によるオクターヴの遅れについても批判を加えている（Fétis 1833: 85）。

最後は、諸声部の入りに関する訂正である。フェティスは譜例 2g-1 を、脚注において 2 のように書き換えている。そして、g-1 の譜例は、鍵盤楽器において、「諸声部の様々な入りを、響きの違いによって強調することができない」（Fétis 1833: 43）のでよい効果を生まないと述べている。譜例 2g-1 と 2 の 2 つの譜例を比較すると、解決の和音と、その前の 3 つの和音の配置が訂正されていることが分かる。例えば、g-1 では、解決の直前の和音から解決の和音への進行において、最上声部が同じ音にとどまっており、知覚しにくい。g-2 では、この同音進行が下声部、つまり目立たない位置に移動している。従って、解決の際、特に解決の役割を担う声部の動きを際立たせることが、この訂正の目的のひとつであったと解釈できる。また、彼は g-1 にみられるような、56 の和音で続く解決への掛留を不快なものと思っている（Fétis 1833: 43）。この和音の不協和音程を最終解決の前に解決させ、フェティスが考えるより望ましい進行とすることも、この訂正の目的のひとつであったと考えられる。

3-3. modification 和音（人工的な和音）とその進行に関する批判

フェティスの理論においては、まず単独で存在する 2 種類の自然和音と、その自然和音の modification から生じる modification 和音（人工的な和音）がある。そして、フェティスの理論上で存在するすべての和音は、この構造下で体系化されていた。そのため、彼は、自然和音と modification 和音（人工的な和音）の区別が認識されていないことや、この規則に背く進行に関しても批判を加えている。

譜例 3a-1 は、4 度音程の予備についての説明の際に挙げられた譜例である。しかし、フェティスは、この減 4 度音程は（短調の）6 の和音の 3 度音程を遅らせるものでしかなく、a-2 のような進行でしか書けないと反論した（Fétis 1833: 34）。つまり、a-1 は延長による予備が必要な 2・7・9 度の不協和音程がないにもかかわらず、延長を伴った和声進行になっている。この理由からフェティスがこの進行での延長を許容しなかったと考えられる。

また、譜例 3b の進行は、耳を傷つけるとフェティスは述べている（Fétis 1833: 82）。その理由のひとつとして、彼は、第 1 小節の和音における 7 度音程は、置換と延長の結果生じる modification 和音（人工的な和音）の遅れとしてしか考えられない事を挙げている（Fétis 1833: 82）。つまり、この和音が modification の結果ではなく、第 1 小節で予備の和音なしに、自然和音のように単独で存在することを彼が批判していることが分かる。

譜例 3c では、（短調の）II 度音上の 7 の和音が予備なしで存在している。これはフェティスの理論に

と見做した (Fétis 1833: 38)。従ってここには転調後の調の V_7 の和音やその派生形による調的な接触点が必要である。しかし、属音上には46の和音しかなく、2つの調が接触点なしに連続してしまっている。接触点となる和音がない以上は、 \sharp ソ音はラ音に進行し、解決しなければならないとフェティスは考えたのだ。譜例4-3についても同様である。

譜例4 転調に関する批判：接触点のない2つの調性の連続 (Fétis 1833: 39)



4. まとめ

以上の分析から、フェティスは、翻訳の過程で、①音程や和音の分類、②和声進行、③自然和音と modification 和音 (人工的な和音) の構造の区別、④和声外音、⑤転調に関して、詳細な批判的注をつけていることが明らかとなった。フェティスはこの他にも、音程の名前、和声記号や印刷上の誤りに対して揚げ足を取るような注さえつけている。そして、これまで見てきたように、これらの和声理論への批判及び訂正は、全てフェティスの理論に従ってなされている。

本書が出版された1830年代初期は、ベートーヴェンの作品がフランスに紹介され始めた時期と重なっている。例えば、1828年にパリで創設されたパリ音楽院演奏協会は、19世紀初期のフランスへのベートーヴェン受容に大きな役割を果たした (今谷; 井上 2010: 281-284)。さらに、この演奏協会の活動に際し、パリ音楽院の教授職にあったフェティスが、実践作品の批評を通してフランスにおけるベートーヴェン受容の一端を担ったことも、既に先行研究から明らかになっている (Bloom 1972-3, Bloom 1978: 92-207, Kraus 2001)。すなわち、フェティスは、自身の創設した《ルヴュ・ミュージカル》*La Revue musicale* に、演奏協会の演奏会で演奏されたベートーヴェン作品への批評を掲載した。そして、演奏自体の批評のみならず、作品の全体的な構造、動機の長さ、印象など様々な観点から分析を行うことで、広く一般にコンサートとベートーヴェン作品の両方についての詳細を知らしめている。また、1828年には、演奏協会に捧げる版としてベートーヴェンの交響曲全集校訂版を出版した。出版に際して行われたベルリオーズとの議論の様子からは、パリの音楽界においてこの校訂が大きな論争を引き起こしたことがうかがえる (ベルリオーズ 1950: 324-326)。さらに彼は、校訂譜出版の際、ベルリオーズらとの議論により削除したと考えられている交響曲の「書き換え」を自身の理論書において行った⁷。

一方、その受容史において、フェティスが、ベートーヴェンの実践作品への批評に加えて、本稿で見てきたようなベートーヴェンの理論への言及をしていることは、これまで余り注目されてこなかった。この本の出版とフェティスが加えた批評は、その時代背景を勘案すると、実践的側面のみならず理論的側面からも行われた、フランスにおけるベートーヴェン受容の一側面と捉えることができるだろう。そして、ベルリオーズらによってベートーヴェン作品が好意的に受け入れられ名声を獲得する中で、フェティスは理論・実践の両面に対して自身の理論を適用し、その内容を大胆に「訂正」という形でこれらの受容を助けたということにも、注目すべきである。

註

1. 理論書の翻訳に関しては、フェティスとの活動の類似性が指摘されているショロンが、アルプレヒツベルガーやマールブルク等の書の仏語翻訳版を出版したことが知られている (Simms 1975: 116)。
2. この会合に関する記述 (Becquart 1972: 9) から、恐らくこれは上記2等賞に関連して、ベルギー人の受賞者達をたたえる会合であり、引用の文章はフェティスの紹介文であったと推測される。
3. ザイフリートは、タイトルにおいて「通奏低音法、対位法、作曲法 (im Generalbass, Contrapunkt und in der Compositionslehre)」という言葉を用いたようであるが、これをフェティスは「和声と作曲 (d'

harmonie et de composition)」と翻訳している。ここでは、フェティスの翻訳に従って、「和声理論への批判」とする。

4. しかしザイフリートが、ベートーヴェンの手によるいくつかの記述と、ベートーヴェンがアルブレヒツベルガー等の著書から引用したその他の理論家達に基づく記述の区別を理解せず編集に当たってしまったことも、指摘されている (Senner et al. 1999: 114)。セイヤー 1971: 171 にもこの混同についての言及があるが、ザイフリートが遺稿類からそれらを発見したという点や (Senner et al. 1999 の記述によると、これらの遺稿は [記事の書かれた時期を勘案するとおそらく 1827 年の] 11 月 5, 6, 7 日にオークションにかけられたとある)、未整理のまま公表した練習課題の多くが弟子達のために書かれたものであったという点などで、Senner et al. 1999 とはやや記述の様子が異なる。“Beethovens theoretische Studien” 「ベートーヴェンの理論的学習」(1863), *Beethovens Studien* 『ベートーヴェンの学習』(1873) の中で、ノッテボーム (Gustav Nottebohm) は、この混同を正した (Senner et al. 1999: 114)。すべての記述をベートーヴェンの記述としたフェティスも、このことを理解していなかった可能性がある。
5. この進行は、現行の和声学においては完全 5 度から減 5 度への進行であり、許容される。
6. セイヤー 1971: 158 によると、ベートーヴェンが、アルブレヒツベルガーの元での課題の欄外に、掛留で予備のない 7 の和音を書き、これが許されるか否かという旨を付記したという記録が残っている。
7. ベートーヴェンの実践作品へのフェティスの批評の詳細は、大迫 2011: 240-258 を参照のこと。

* 本稿は、平成 22 年度に、お茶の水女子大学に提出した博士学位論文『フランソワ＝ジョゼフ・フェティスの音楽思想—その和声理論を中心に—』第 2 部に基づく。

引用文献

《刊行文献》

- Bequart, Paul. 1972. “[Extrait de] Discours prononcé dans une réunion d’artistes belges habitants de Paris...,” in *François-Joseph Fétis et la vie musicale de son temps 1784-1871*. Bruxelles: Bibliothèque royale Albert I^{er}: 9.
- Berlioz, Hector. 1870. *Mémoires de Hector Berlioz: comprenant ses voyages en Italie, en Allemagne, en Russie et en Angleterre, 1803-1865*. Paris: Calmann Lévy. [ベルリオーズ, エクトル; 清水脩 (訳) 1950 『ベルリオーズ回想録』 東京: 音楽之友社]
- Bibliothèque royale de Belgique. s. d. *Catalogue de la bibliothèque de F. J. Fétis acquise par l’État belge*. Bologna: Forni.
- Bloom, Peter Anthony. 1978. *François-Joseph Fétis and the Revue musicale (1827-1835)*. Ann Arbor, Michigan: UMI.
- . 1972-3. “Critical reaction to Beethoven in France: François-Joseph Fétis,” *Revue belge de musicologie*. xxvi-xxvii: 67-83.
- Choron, Alexandre-Étienne; Fayolle, François-Joseph. 1810. *Dictionnaire historique des musiciens*. Paris: Valade, Lenormant: t. 1.
- Fétis, François-Joseph. 1833. *Études de Beethoven: Traité d’harmonie et de composition, traduit de l’allemand, et accompagné de notes critiques, d’une préface, et de la vie de Beethoven*. Paris: M. Schlesinger: t. I, t. II.
- . 1840. *Esquisse de l’histoire de l’harmonie considérée comme art et comme science systématique*. Paris: Bourgogne et Martinet.
- . 1844. *Traité complet de la théorie et de la pratique de l’harmonie* (2^e ed.). Paris: Maurice Schlesinger.
- . 1862. “Fétis (François-Joseph),” in *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique* (2^e ed.). Paris: Firmin-Didot: 3: 226-239.
- Huys, Bernard et al. 1972. *François-Joseph Fétis et la vie musicale de son temps 1784-1871*. Bruxelles: Bibliothèque royale Albert I^{er}.
- 今谷, 和徳; 井上, さつき 2010 『フランス音楽史』 東京: 春秋社。
- Kraus, Beate Angelika. 2001. *Beethoven-Rezeption in Frankreich*. Bonn: Beethoven-Haus.

大迫, 知佳子 2011 『フランソワ＝ジョゼフ・フェティスの音楽思想——その和声理論を中心に——』
お茶の水女子大学博士論文。

Thayer, Alexander Wheelock. 1964. *Thayer's life of Beethoven*. Forbes, Elliot (ed.). Princeton, New Jersey:
Princeton University Press: 2vols. [セイヤー, アレグザンダー ウィーロック; 大築邦雄 (訳) 1971
『ベートーヴェンの生涯<上>』 東京: 音楽之友社, 大築邦雄 (訳) 1974 『ベートーヴェンの生涯<
下>』 東京: 音楽之友社]

Senner, Wayne M; Wallace, Robin; Meredith, William. 1999. *The critical reception of Beethoven's
compositions by his German contemporaries*. Lincoln, Neb.: University of Nebraska Press: vol. 1.

Seyfried, Ignaz Ritter von. 1853. *Ludwig van Beethoven's Studien im Generalbass, Contrapunkt und in der
Compositionslehre, aus dessen handschriftlichem Nachlass*. Leipzig: Schuberth.

《非刊行資料》

[Lebreton, Joachim. 1807.] *Diplôme du second grand prix de composition musicale*. - Bibliothèque
nationale de France - département de la Musique.